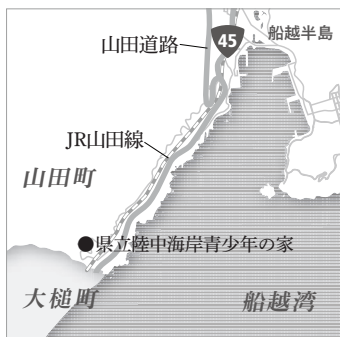
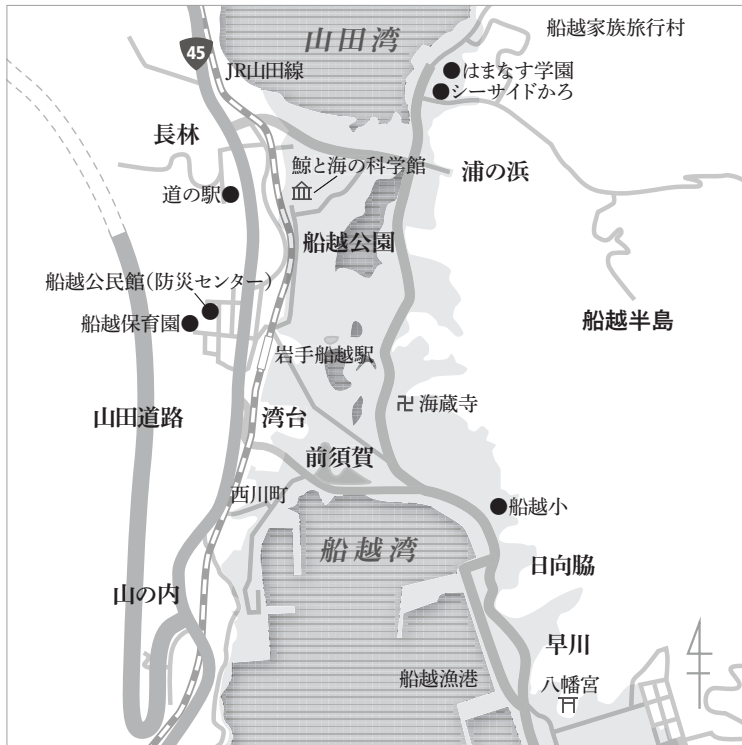


船越

船越半島の付け根に当たり、北側が山田湾、南側が船越湾に面した船越地区。南北を走る国道45号を挟んで山側の高地と海側の低地に分かれ、海側の地域では二つの湾からの津波がぶつかり合って威力を増し、甚大な被害を出した。浦の浜にあった介護老人保健施設「シーサイドかる」に津波が直撃、入所者74人と職員14人が犠牲になった。海沿いの古刹、曹洞宗海蔵寺も丸ごと流され、津波は避難場所に指定されていた船越小学校の1階天井部分(海拔18メートル)まで達した。いったん校庭に集まった児童ら約160人は海の異変に気付いた校務員の機転で裏山に逃げて助かったが、昇降口付近に避難した近隣住民の中には津波にのめれた人もいた。同小に近い日向脇ひなたのわきの集落も大きな被害を受けた。



地図内の■は津波の浸水範囲
※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

死者・行方不明者	86人
震災前の人口	2,178人
全半壊家屋	172戸
被災家屋の割合	26%

山田中学校1年「当時・船越小学校4年」富山浩恵

地震が発生した時、私は教室にいました。4年生で、高学年ではあったのですが、何がなんだか分かりませんでした。こんなに大きく、長い地震は初めてで、もしかしたら地震じゃないのかもしれません。と思ったほどでした。

教室から外に出た後、校庭に避難しました。割れそうな勢いで窓ガラスが揺れていました。校庭に避難して少しすると、サイレンが鳴り、大津波警報が発令されました。校務員の方が走ってきて、その指示でもっと高い避難場所へ行きました。後で分かったのですが、校務員さんは校庭では危ないことを校長先生に伝えるために走ってきてくれたそうです。

避難場所に着いて間もなく誰かが大声で言いました。「津波が来たぞ。山へ登れっ!」。びっくりしましたが、がむしゃらに登りました。少し平らになっている所でみんなで座っていました。しばらく話をしたり笑ったりしていました。その時は何が起きたのかやっぱり分かっていませんでしたが、暗くなるにつれて、泣く人も出てきました。下山というほどの距離でもありませんが、いったん下りました。すると、火がたかれています。そこで温まることにしました。雪が降ってきたので近くの家に入れてもらいました。余震が続く、長い夜に感じました。

朝、起きると消防団の人たちが来て、おにぎりとお水ボトルの水を配布してくれました。私たちの学校は船越半島にあります。船越半島は津波により、一時孤立しました。おにぎりを食べ終わってしばらくすると、船越保育園に避難することになりました。そちらへ向かうためには、浸水によりぬかるんだ所を行かなければなりませんでしたが、消防の人がある程度歩きやすくしてくれていたのので助かりました。津波警報が出たままで大変でしたが、無事に着き、その後家に行きました。家は高台にあるのですが、しばらくは電気も水も使えなくて苦労しました。

後から思えば、多くの人に本当に助けられたと思います。校務員の人がいなければ生きていなかったかもしれないし、津波が来たと叫ぶ人もいなかったら逃げなかったかもしれません。家に入れてもらえなければ、一夜を越すことができなかったと思います。消防の人や先生方、いろいろな方々に助けられ、支えられてこうして生きていられます。感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

山田中学校1年「当時・船越小学校4年」 芳賀優香

私たちがあんな経験をするなんて、思ってもいませんでした。

あの日、私は「行ってきます」と言って、いつも通り学校に向かいました。まさか家にもう二度と帰ることができなくなるなんて思ってもいませんでした。学校に着いてふだん通りの学校生活を過ごしていました。

午後2時46分。大きな地鳴りと共に大きな地震が発生しました。今まで経験したことのないような揺れでした。みんなが机に隠れ、泣いている子もいました。そんな中、先生は2階にあるパソコンルームに、他の子たちの無事を確認しに行きました。何分かつて帰ってくると、みんなでベランダから外に出ました。その後、津波警報が発令されたという放送が流れ、安全な校庭に移動しました。校庭に行くと、すでに他の学年は避難していました。ですが、1年生の何人かはもう下校していて、どこにいるのか分かりませんでした。

何分かつと、親が迎えに来たり、地域の方々が集まって来たりしました。とても不安で、どうしたら良いのか分かりませんでした。「みんな同じ不安な気持ちなんだ。大丈夫。大丈夫」。そう自分に言い聞かせて次の指示を待っていました。

その後、田代修三さんという昔から地元に住んでいる校務員の方の指示を受けて第2避難所に避難しました。5分位経過したでしょうか。背後から「ゴーツ」という音と共に大きな津波が押し寄せました。皆叫びながら最終避難所に駆け上がりました。何とか助かりましたが、この時、この瞬間からつらい生活が始まりました。

午後5時、津波が引いたということで少し下の竹林に下りていきました。とても残酷な景色が広がっていました。電柱は倒れ、船が転がり、木が散乱していました。皆ぼうぜんと立ちつくしていました。すこしたつと、大人の方たちがたき火をしてくれて、みんなで温まりました。そこに、けがをした人が担架で運ばれてきて、津波や地震で多くの人がひどい目にあったことを知りました。

午後7時。近くの家に入り、暖を取りました。5人で一つくらいの毛布を借り、不安な夜を過ごしました。

次の朝起きると、とても悲惨な景色に自分の目を疑いました。堤防に乗っている船、散乱している木々、転がっている車、倒れている電柱。昨日の夜よりも無残な景色で胸が痛みました。おにぎりや飲み物の支援が届き、みんなで食べました。午前8時ごろ。船越保育園に移動しました。移動するといとこがいて、安心しました。私の家族は皆助かり、再会することができました。あんな残酷な光景を見た私たちだからこそ、できる事があります。それは、この恐ろしい体験を後世に伝えていくことです。まず、私たちから語りかけなければなりません。この「自ら進ん

で」を暮らしにも発展させていき、新しい山田をつくりあげていきたいと思っています。

誰かを助けられる人に

【船越】

3

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」大畑優美^{ゆみ}南^{みな}

地震が起きたのは確か金曜日の5時間目だった。体験したことのない大きな地震と共に「津波」という言葉を聞いた。気付いたら山を登っていた。誰もが必死に登った。上へ、上へと、とにかく登った。そしてずっと時間が過ぎるのを待った。私たちはまだ想像を膨らますことしかできない。逃げながらたった一瞬見た信じられない景色が脳裏に焼きついた。

空が暗くなってきた、何人かの先生たちが初めに下山した。しばらくして、私たちも続いた。下山後初めて、津波という災害の恐ろしさを知った。思い出すのは家族のこと。私たち人間はなんて無力なんだろう。ただこの現実を受け入れるしかないんだからと心から思った。下山してすぐ、火が見えた。大人たちががれきで火を燃やしていた。

その人たちは、生徒を優先的に火の前に立たせてくれた。私は少し安心した。雪が降ってきた。この日の雪は、みんなの悲しみがまるで空に届いたようだった。私たちは近くの民家にお邪魔して今日の話を話しながら眠った。長い1日がやっと終わった。

朝が来て、消防団の方々がおにぎりと飲み物を持ってきてくれた。食べ終わって少し休み、船越保育園に行くことになった。保育園への道はぼうぜんとする光景が続いた。私の知っている所とはまるで違っていた。途中からバスに乗って保育園に向かった。

保育園に着いて少しすると、父が迎えに来てくれた。父と弟と私は歩いて家へと向かった。家には母がいて、家族の無事を確認できた。それから水をくみに行ったりして、大変だった。でも、ガスが通ったので米を炊くこともできて少し楽になった。配給にも並んだ。自衛隊の人たちにもいろいろ助けてもらった。夜は静かだった。父は毎日ラジオを聞き、母は防災センターなどに知り合いの情報をつかみに行った。田の浜に住むおじいちゃんとおばあちゃんが家へ来た。毎日色んな話をした。そんな毎日が続いて、電気が通った。生活が充実しつつあった。陸中海岸青少年の家（研修施設）の仮校舎で学校が始まるころには地域が少しだけ元気になった。

あれから、約3年がたった。今、私がこの真実を作文につづれるのは、あの時の私たちを支え、助けてくれた多くの恩人たちのおかげだと思う。多くが名も知らない人々だけれど、私はこの人たちに感謝でいっぱいだ。あの時の恩は、いつか返したいと思う。私自身もこの人たちのように、誰かを助けられる人間になりたい。もし将来、同じようなことが起こったとしたら、私たちは、あの時の犠牲を無駄にせず、それぞれが命を守る術を身につけるべきだと思う。

みんなが一つになれた

【船越】

4

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」三上涼太

あの日、僕はまだ小学生だった。何が起こったか分からず、ただ一心不乱に逃げた。大きな波と共に家や車、何から何まで流されていた。すぐに分かった。

「津波だ!」。少し前に僕は近くのおじいさんから津波について話してもらっていた。その時はただの大きな波とだけ思っていた自分の考えが甘すぎた。その後、たくさんの人々が亡くなったり、家族を失ったりして悲しい目にあったことが分かった。

夜になり、僕たちは火に当たっていた。でも僕たちが温かい思いをしている時も、ほかの人たちは寒い思いをしているんだと思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。その後も何人も何人も津波をかぶってしまった人や、かろうじて生き延びた人たちが来て、僕は切ない気持ちになった。

月日が流れてもみんなの気持ちは変わらないと思う。あのような出来事は二度と起こってはいけない。でも、この震災を通して世界の人々と一つになれた。助け合う心、つながる絆、日本だけではなくみんなが一つになれたことを大切に思う。だが、震災の最中に犯罪や盗み、争いなどが起きていた。なぜみんなで頑張っているのにくだらない争いをするのか、今からでは遅いかも

しれないが、皆さんにあやまってほしい。

だが、一番考えていたことは小学校だ。学校もこわれてしまい、震災後はなかなか行けなかった。でもある日、近くの保育園に皆が集まることになった。たまらなくうれしかった。週1回だったが、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。陸中海岸青少年の家の仮校舎で学校生活を送り、卒業式を行うことができたのも、近所の人たちや施設を貸してくれた方々の支えがあったからだ。本当にありがとうと言いたい。

3年がたとうとしている今でも僕の気持ちは変わらない。震災で学んだ事を絶対に忘れずに、世界の人々との絆を絶やすことなく前に進んでいく。それが今の山田には一番大切なことだと思う。

判断力の大切さ学ぶ

【船越】

5

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」山崎魁斗

あの日、僕は小学校の図工室にいた。午後2時46分、大きな長い地震響きと共に、ドーンと、今までに体験したことのない大きな地震がきた。僕たちは、急いで机の下に隠れた。怖かった。長い地震が収まり、全校で校庭に避難した。そして、校庭にいてはあぶないと先生たちが判断し

て、学校の裏にある山に登ることにした。山に向かって歩いている途中、バキバキバキと波で倒される木の音がした。後ろを振り返ると黒っぽい、大きな、大きな津波が迫ってきた。みんな必死に山に登った。山のかなり上まで登った所に少し広場があつてそこで待機していた。

しばらくすると雪が降ってきた。寒かった。あたりもすっかり暗くなり、下山することになった。下山すると、小学校の裏にあった家の人たちががれきを燃やして温まっていた。そこに僕たちも交じって温まった。するとそこに、津波で流されて、けがをして苦しそうにしている人が来た。その人を見たら家族の安否が急に心配になった。僕たちは4軒くらいあった家に入れてもらえらることになった。家に入ったら暖かかった。その日の夜、僕は、家族や知り合いのことが心配で全然眠れなかった。

次の日、高台にある保育園まで移動することになった。歩きながら、津波によって破壊された町を見て、どこがどこだか分からなかったし、何が起こったかもこの時はまだ理解できなかった。保育園に着いたら、じいちゃんが迎えに来てくれた。やっと家に帰れた。

僕はこうやって家に帰れたけど、もう少し判断が遅れていたら、学校生活を今のように楽しく送れていなかった。だから、判断力はとても大事だと学んだ。次にこのようなことがあったら素早く避難すべきだと思うし、自分もそうしたい。

3・11を経て原子力を考える

【船越】

6

あの日から原子力への考え方が一変した。

午後2時46分の地震。今までに体験したことのない大きな揺れ。大きく白波を立てて押し寄せた津波。ただでさえ東北の人は苦しんでいた。その中で、福島第1原発の事故が発生した。なぜこんなことになってしまったのだろうか。

僕はそれまで、原子力についてあまり考えたことがなかった。原子力発電は、少ない原料で大きな電力を発電でき、しかも地球温暖化で問題になっているCO₂を排出しないクリーンな発電方法。ただ、発電に用いられた核燃料の処理は地中奥深くに埋めるしかない。でも、僕は、安全で空気を汚さないならとてもいい方法だと思っていた。

そして3月11日。僕の考えは全く逆の方向に傾き始めた。今まで安全だと思っていた原子力発電が、人間に牙をむいた。誰も想像していなかった。想定外の津波の被害を受け、冷却不能になった炉心はどんどん熱を持ち、冷却用の水をどんどん蒸発させていく。放射性物質を含む汚染された水や蒸気が空へ、海へ放出された。目に見えない放射能の恐怖が人々を襲い始めた。

毎日休むことなく育てた牛が汚染される。土を作り、水を与え、肥料をやり、草を取って育て

山田中学校2年 山崎昂太^{こうた}

た野菜が汚染される。海が、魚が汚染される。牛の、魚の、植物の、そして人間の命が奪われる。なぜこんなことになってしまったのだろうか。

これは誰かのせいなのか。いや、これは便利な生活に慣れ過ぎ、便利な生活ばかりを追い求めてきた私たちが悪いのではないだろうか。「安全」も「科学技術」も「人間」も完璧ではない。世の中に「絶対大丈夫」はないのだ。それも今回の震災が教えてくれたことだ。今、誰のせいと話し合う時間も必要もない。

今この瞬間も、命がけで原子力を何とかしようとしている人がいる。放射能の恐怖から人々を守ろうとしている人がいる。今この瞬間も、もう二度と戻れないかもしれない故郷を思い続けている人がいる。

僕も家を津波に流された。思い出の詰まった家、安心して暮らせる場所を奪われた悲しみは深い。でも、仲間のいる町にすることができ。福島の人たちは、帰ることすらできない。

この現状を生んだのは、僕たちだ。便利な生活のありがたさに気づかず、資源には限りがあることを知りつつ、便利すぎる生活を求め続けた僕たちだ。震災は多くのものを奪ったが、たくさんのかを教えてください。蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押せば電気が付く、暖かい部屋で家族と過ごす、そんな当たり前の生活は、決して当たり前のことではなく、多くの人たちに支えられていたこと。原子力の安全を守るとは命がけなのだということを。

今、原子力に代わる自然エネルギーに切り替えようとか、原子力発電をやめようとか思う人が

増えてきた。僕は思う。今、原子力発電をやめてしまったら僕たちの生活はどうなってしまうの

だろうと。ちょっとやそつとの節電では甘いと思う。僕たちは今、自分たちの生活をふり返り、本当に必要なものは何なのか、これからの生活に残すべきものは何なのか、真剣に考えなければならぬのではないのか。原子力を廃止するのではなく、徐々に新しいエネルギーに切り替え、自然と共存しながら安心して生活できる未来を創っていかなければならないのではないのか。

3月11日のあの日から、もう6カ月。あの日のこと、あの時の事を忘れかけている人もいるかもしれない。僕にとつて、原子力を取り巻く人たちにとつて、あの日は始まりだった。今も命を削って僕たちの安全を守ってくれている人たちがいる。素直に心から「ありがとうございます」と伝えたい。3月11日から学んだこと、それはしっかりと自分の目で見て、自分で考えること。僕たちは今、一つになり、行動しなければならない。

「やまだの作文」第40集

「正常化の偏見」から脱する

【船越】

7

奥州市立梁川小学校長「当時・船越小学校長」佐々木道雄（56歳）

あの日、校長室にいた私は、緊急地震速報を受信するとすぐ、職員室のテレビのスイッチを入

れました。その直後、地震が起こり、間もなくテレビの画面も消えてしまいました。停電でした。テレビが倒れそうになるのを押さえながら、地震が収まるのを待ちました。校内放送が使えなくなったので、副校長と養護教諭に、各教室に行き、避難所とされていた校庭に避難するように伝えてもらうことにしました。その後私は、管理棟の西側のつなぎ目の部分の状態を確かめ、上着を着て靴を履き替え、校庭に行きました。

この日、全校児童174人のうち6人が欠席・早退。1年生は帰りの会が終わり、下校していた児童が9人。159人が校内で地震を経験したことになります。

後から調べてみると、校庭にいた間に8回の地震がありました。その間、海の様子を見に行ったりしていました。でも、それほどの変化を見つけることができませんでした。地震のたびに怖がる子供たちを励ましていました。

そうしているうちに、校務員の田代修三さんから、「もっと高い所に避難しましょう」という進言をもらったのです。校庭に避難したのが午後2時50分過ぎ。裏山に避難を開始したのが3時20分ごろ。約30分間、校庭にいたのです。群馬大の片田敏孝教授の分析による心理、「逃げない」という意思決定をしたのではなく、逃げるという意思決定ができないで」「ここは大丈夫だ」と思い込む「正常化の偏見」のため、時だけが過ぎていったのでした。田代さんの一言で「よし避難しよう」という意思決定ができました。先生方もすぐ私の指示に従ってくれました。整然とした避難でした。津波を見てからの避難ではなかったので、落ち着いた行動となったのです。この

時点で、23人の児童を家の方に引き渡していたので、児童は136人でした。

一列のまま校庭を離れ、後藤自工所有の空き地を目指している途中で、沢を上がってくる黒い波を見たのです。

後日、めちゃめちゃになった校長室の机の上に、どこからか掘り出された時計が置いてありました。時計の針は午後3時27分ごろを指していました。「生かされて」という言葉が実感として重みをもって体の中に入りました。片田教授の言葉は、理性的に考えればその通りですが、私が思っていることは、やはり荒神様（あらがみ荒神社）が子供たちや私たちを救ってくださったのだな、ということですね。なぜなら、避難した私たちだけでなく、下校していた1年生も、その安否を確かめに行った教職員も無事だったからです。ただ、パーフェクトとまではいきませんでした。だからこそ、「生かされて」という言葉の重みがあると言えるのかもしれない。

あの後、荒神様の所までは何回か行きました。鳥居のあった右側の坂を上がり、外海が見えるいつもの場所まで行くことができました。でも、磯伝いに、黄色のペンキが塗ってあった小さな灯台の見える場所には、一度行って足がすくんでしまいました。胸が締めつけられるような感じがしたのです。残念ながらその後は、まだトライしていません。

「忘れない・そして前へ」

船越婦人会長 後藤夕香里（58歳）

早いもので東日本大震災から1年半がたち、以前の暮らしと変わった事といえば、家族が3人増えたことでしょうか。

震災当日私たちは、娘の結婚式で内陸の奥州市にある式場にいました。今これから挙式が始まるという時の地震。立つことも座することもできないくらい揺れ、今まで経験したことのない状況に頭の中が真っ白になり、自分が何をしていたのか分からない時間がただ過ぎていきました。少し落ち着きを取り戻したところに目に入ってきたのが、仙台空港を襲う津波の映像でした。

「あー、私たちの工場ももうないのかな」と頭をよぎり、とても不安と焦りでいっぱいでした。でも、隣で泣いている娘を見ると、その思いを顔に出すこともできず、とても苦しかったです。

結婚式は式場の配慮で式だけ挙げ、電気もないビジネスホテルで一晩を過ごしました。いつもなら3時間弱のところを12時間かけて帰って来た山田は、火の海でした。その後、三陸道を織笠の龍泉寺から歩いて、船越に着いて真っ先に目に映ったのは、何もなくなつて湖のようになっていた自動車工場の跡地でした。

一時は廃業を考えた夫でしたが、地域の人たちの励ましの声で車の事務処理から工場を再開し、今では仮設ながら一般修理・車検修理もできるようになりました。

夫は以前より集中力がなく、人の話を聞いても頭に入っていない状態が震災当時と変わりになく今も続いているのがしばしば見えます。そんな中でも、日々仕事に励んでいる姿に私はただただ敬服です。

その夫の提案は、「後藤家の避難場所は船越防災センターにしよう。いつどこで震災に遭うかわからないので、自分の命は自分で守る『てんでんこ』で。生きていれば時間がかかっても必ず会えるから、焦らず落ち着いてから防災センターに集合するように」ということでした。ごく当たり前のことですが、常に頭の隅に入れておくのが私たち被災者の教訓かなと思います。

私は津波には実際遭っていないし、見ていません。でも、現実に仕事場がなくなり、住んでいる家の1階が壊れ、物がなくなつてからは、海が怖い、地震が怖い状態が今も続いています。これがいつまで続くのかも不安です。こうして生活できているのは、震災当時から私たちのために一生懸命お世話していただき、見守ってくださった地域の人たちのおかげです。また、世界や全国の人々からお見舞い、義援金や物資を頂き、ありがとうございました。

私たちは、東日本大震災から学んだ地震、津波の恐ろしさ、人を大切にし、敬うということを子供や孫に伝えていかなければならないと思います。

命ある感謝と生きるつらさと

【船越】

9

船越婦人会副会長 三浦初子（63歳）

あの日の事、あの時の事、忘れられない記憶と忘れてしまいたい記憶をたどると、ただ恐怖心だけが思い起こされます。

昼食を済ませたころ、今まで感じたことのない異常な揺れを感じて身構えた時には、すでに電気も携帯電話も途切れていました。茶の間に1人でいる母のもとへ駆けつけ、早く安全な所へ連れて行かなければと焦っても、立っているのがやつとの揺れではどうにもならず、しばらくは2人で手を握り合い、ぼうぜんとするばかりでした。

地震の合間を見計らい、夜には帰って来られると信じて、着の身着のまま高台にある友の家に向かいました。数度の地震におびえながら頭をよぎるのは、八戸市から国道45号をわが家目指して自動車を走らせているだろう娘の姿でした。「今、どの辺りだろうか。津波に遭ったら自動車ごと流されてしまうのだろうか」など、悪い考えばかりで頭がいっぱいでした。

何度目かの揺れの後で「津波だ」の叫び声に海の方を見た時、波の大きさに驚きました。その後、また押し寄せた津波は、想像をはるかに超えた巨大なものでした。鉄筋2階建ての工場をのみ込み、その屋根よりはるかに高く大きな波が、船もろともものすごい速さで迫ってくるのが見

えた時は、この場にいることさえ危険に思えました。正に恐怖の絶頂でした。さらに高台の避難所を目指して移動し、避難して来た大勢の人たちと落ち着かない一夜を過ごして、翌朝、目の当たりにした惨状は信じがたい光景でした。

母と自分はここに無事でいるけれど、「娘は？ 息子は？」と2人の子供たちの安否を憂えながら、連絡の取れないもどかしさの中、婦人会はじめ各団体の炊き出し等の作業を手伝って心を静め、3日後の夜に、娘の無事な姿と対面した時の喜びと安堵感は生涯忘れられないと思います。命があったことへの感謝と、生きることのつらさを味わいながら過ごしたこの1年半でした。

「明日へ向かって」第1集

人の温かさに触れた

【船越】

10

大槻悦子（63歳）

「夫が帰って来ないんです」。私はTBSテレビ報道局の森岡梢さんとカメラマンに涙ながらに伝えた。この言葉が様々な出会いの始まりであった。

大槌町吉里吉里で用事を終えようとした時に地震が起こった。友達と急いで帰宅し、津波が来る前に何とか家に着くことができた。友達も無事に山田の長崎地区まで帰った。夫は長崎の食料

品店「フレンド」で働いていた。娘は大学卒業で、3月10日に卒業式の打ち合わせのため盛岡へ行っていた。地震後すぐに電話がつながり、声を聞くことができた。八戸の自衛隊に勤めている息子とは連絡が付かなかったが、娘が「母は無事だが父の行方が分からない」と伝えてくれた。

家から大きな物を持ち、船越保育園へ避難。船越湾漁協の建物が黒い波にのまれていくさまをこの目で見ていた。何が起きているのか、何も考えることができなかった。湾台に住んでいる叔母も避難してきたが、家は津波にのまれたと涙ばかりであった。

大沢、盛岡、東京に住む妹たちや親戚などに連絡したくてもできないもどかしさ、頼れる夫、家族がいなくて寂しさが胸がいっぱいだった。「夫はもしかしたら配達中に……」と嫌な考えもしてしまっただが、どうか生きていてほしいと思いを強く持った。船越公民館に行き、近所の人たちと不安な夜を共にした。電気の明かりも食料も何もない状況でこれからどうしたらいいのか、生きていけるのか、様々な思いが交錯した。

そんな中、釜石の中村家（料理店）を取材後、宮古へ向かう途中に山の中で被災したTBSの森岡さん、秋田でカメラマンをしている伊藤優さんなどが公民館へ来た。「盛岡へ映像を届けるので現状を伝えたい。話せることがあれば何でも話してください」と言われ、夫が帰って来ないこと、食べ物がいないことなどを訴えた。その後、彼女らは何度も山田町を訪れ、映像を記録してくれた。

翌朝から婦人会の仲間と炊き出しを始めた。皆いろいろな思いを胸に、一つ一つ心を込めておにぎりを握った。2日目のこと。夫が歩いて探しに来てくれた。夫は自衛隊の官舎（山田町飯岡）近くに車を止め、避難していたそうだった。お互いに「死んだかもしれない」と思っていたようだ。夫に会えたうれしさでいっぱいであった。言葉にはできなかったが、「生きていてくれてありがとう」と心から思った。

3日目、娘も盛岡から何とか帰宅、やっと家族3人がそろい、気持ちが少し落ち着いてきた。娘の話だと、涙を流しながら「食料がない、どうしたらいいのか」と訴えている私の姿がネットにアップされていたという。全国の方々が見ていてくれた。カメラマンたちに感謝した。

家が無事だったので、3日目から家族と叔母の4人で生活した。日中は家族3人で公民館へ行き、私は炊き出し、夫は物資の仕分けや会議に参加し、娘は窓口での対応や名簿作成などを行った。家族も家も無事だった分、私たちでできる事をやらせてもらった。船越公民館にはたくさんの人が毎日出入りしていて、おにぎりの配給がいつなくなるか分からなかった。誰もが不安で目の前が見えない日々。当時の状況には、絶望という言葉が当てはまっていたように思う。

そんな中、全国から支援物資が届き、東北を応援する新聞記事も掲載されていた。東京に住む妹の知人が秋田の商工会議所において、大型トラック2台に物資を満載して届けてくれた。後日、秋田の皆さんにはカレーライスの炊き出しもしていただいた。人の温かさに触れることができた。そのほかにも多くの方々に支援していただいた。このことを一生忘れてはいけな

自衛隊の支援活動も忘れてはいけない。国の仕事とはいえ、救助、搜索、復旧作業、心も体も温めてくれたお風呂の設置と、助けていただいた事は数多くある。仕事で山田町に来ているのに自衛隊員の息子とは震災後2カ月会えなかった。息子は陸前高田など被災地の至る所を回っていたという。そんな息子の仕事に誇りを持ち、感謝した。

TBSの森岡さんは「被災地取材を通して、何か自分にできることはないかとの思いが強くなくなっていった」と話してくれた。彼女は、鎮魂の思いを込めた花火を被災地で打ち上げたいという東京の若者たちが立ち上げた「LIGHT UP NIPPON」という団体の一員になっていた。

2012年8月11日、変わり果てた風景の山田町で、希望の光と多くの笑顔が山田湾に咲いた。娘も山田のために役立ちたいと、花火の打ち上げでは商工会青年部と一緒に運営を手伝った。震災を機に、たくさんの方と出会うことができた。つらさの方が多いが、決してそればかりではなかった。

震災から2年が過ぎ、これまでの生活、当たり前前の事が当たり前ではなかったことに気付かされ、一日一日を大切に過ごさなければと感じている。生かしてもらった私たち家族は地域の人と交流し、できる事を少しずつやっていきたい。何事も感謝しながら笑顔で過ごそうと話し合っている。

「明日へ向かって」第2集

夢なら覚めてほしい

【船越】

11

黒沼五百子（50歳）

今までに経験した事がない巨大地震と大津波が沿岸を襲いました。わが家は海のすぐそばにあります。海を見ていた父が「津波が来る」と言ったので、高い所へ避難しました。

津波にのみ込まれながら流されていく家や船を、ただぼうぜんと眺めていることしかできませんでした。あの日を境に私たちの生活は一変しました。ライフラインも寸断され、仕事に行っていた夫と連絡を取ることもできませんでした。でも、どこかに避難して無事だと思っていましたが、何日たっても夫は帰って来ませんでした。けがをして動けないのか、記憶でも失っているのか、色々な事を考えながら避難所を捜して歩きました。

絶望の中、日数だけが過ぎていき、遺体安置所に足を運ぶようになりました。毎日、毎日、何カ所も捜しました。亡骸がずっと並んでいる所を一体ずつ見て確認しました。

見つからないというつらさと同時に、ホッとしている自分がありました。亡骸に会わないということは、まだ生きているかもしれないという希望が持てたからです。でも、亡骸を確認した時は、私たちの希望は打ち碎かれ、夫の死を認めなければなりませんでした。皆が悲しみました。あれから、私たちは夫がいない悲しみを背負って生きています。夫と生活してきた日々がどん

なに幸せだったか、震災後あらためて感じました。

2年3カ月がたつというのに、夫の話が出たり思い出したりするとすぐに涙が出ます。「行ってきました」のあいさつを最後に、「ただいま」の声を聞けなくて、本当につらい思いをしました。あのころは長い夢を見ているのか、夢なら早く覚めてほしいと何度も思いましたが、全て現実の出来事でした。現実を受け止め、前へ進まなければなりませんでした。

私たちは、震災で亡くなった方々の無念の思いを胸にがんばって生きていかなければなりません。大震災の経験を次世代に伝え、防災意識を高め、誰も犠牲者が出ないように、つらい思いをする人がいないようにと切に願っています。

「明日へ向かって」第2集

思い出すだけで恐ろしい

【船越】

12

福館真美子（52歳）

東日本大震災から2年以上が過ぎた。今でもあの日の事は忘れることができない。私はその日の午後、家業の造船所の集金のため田の浜地区に車を走らせていた。船主さんの自宅の広い庭を見学させていただいて、奥様との会話を弾ませていた。「もつときれいになるよ」「暖かくなった

らいつでも見に来てね」と優しい言葉を掛けていただいた。

「ありがとうございます」と庭を出た瞬間、あの揺れを感じた。今までに体験したことのない揺れに身動きできなかった。すぐそばの電柱にしがみついたが、なかなか揺れが収まらない。家々から人が道路に集まって来た。私は「すぐに工場（造船所）に戻らなければならない」と思いつきながら、どのくらい立ち止まっていただろう。しばらく余震が続いていた。

その後、船越湾漁協の方向に車を走らせた。途中、わかき保育園の園児と保育士さんが避難をしていた。工場へ向かっているが、気持ちとは裏腹に、なかなか前に進まない。漁協前の道路は水門が閉ざされていて通行できず、田の浜郵便局側の道は田の浜から出ようとする私の車と、田の浜の上方方向に行く車とのすれ違いが、その日に限って思うように進まなかった。やっと前須賀の道路を一直線に進んだ。

工場近くの水門も閉められていて西川町を迂回し、いつもなら工場に向かうのに、なぜかその日は高台にある自宅に進んでいた。自宅に着いたが、ハンドルを握ったまま、しばらく動けなかった。近所のおじさんが「津波が来んがよお！」と大声を上げていたが、私は何も考えられず、体が震えていたことを覚えている。

車から降りた私は家の前を通るJR山田線の線路の上で、海の方を見ていた。急に夫のことが心配になり「お父さんは？」と大声で叫んだ。すると、工場から避難してきた息子が「心配すんな。近くさ、いたから」と近寄ってきてくれた。それから間もなくあの大津波が眼下の山の内

の集落に襲いかかった。あの波のスピード、今まで聞いたことのない恐ろしい音、家々の流される速さ、船が流され、波にのまれる瞬間、今でも話をしていると思ひ出してしまう。私の工場も全壊した。もしも、あの時、あと少し時間がずれていたらと考えると、思ひ出だけで恐ろしい。

「明日へ向かって」第2集

無常を突き付けられた

【船越】

13

港 安子（77歳）

突然発生した大地震と大津波にあつという間に押し流されてしまうという現実を目の当たりにして、大自然の威力にはいかなる高度な科学的技術でも無力であることを知らされました。

あたり一面がれきと化した町、あの残酷さには言葉ありません。ライフラインはストップし、被害状況等の報道は得られず、親族や知人を案ずるばかりでした。2日後に実家の全壊と妹の行方不明を知らされ、命あることを祈るばかりでした。総出で探し回りましたが願ひはかなわず、掛け替えのない妹を失い、信じられない日々を過ごしました。日がたつにつれ親族の訃報や行方不明が続出し、心を痛める毎日でした。

妹のいる遺体安置所を探すのも時間を要しました。町はがれきの中を必死な面もちで家族を探す人々が右往左往し、緊迫した状態でした。

遺体安置所で名簿を確認し、妹と対面しました。顔は泥まみれで土が口にいっぱい詰まっており、ハンカチで拭いてやりましたがなかなか取れませんでした。「苦しかったろう」「つらかったろう」と声を掛けるのが精いっぱい涙が止まらず、何度も名前を呼び続けましたが答えてくれません。ただただ冥福を祈るのみでした。

これまでに両親や知人を失い悲しい思いはしましたが、これほどの悲しみはなく、「無常」を突き付けられた思いでした。

この犠牲者の無念に報いることは、大震災での教訓を後世に語り継ぐことであり、時を経ても3月11日は、忘れてはなりません。きつと亡くなられた方たちは、私たちを見守ってくださいと思います。その事を信じて、忘れてはならないと心に誓いました。

「明日へ向かって」第1集

村木まさ子（70歳）

大きな揺れに家の中の物がガラガラと落ち、立っていられずぼうぜんしていると、階下から「小学校1年生の孫が下校途中で歩いているから、迎えに行け」という姑の声が聞こえました。私も心配でしたが、娘からは「常に学校からの指示が出てから動くように」と言われていたもので、ためらっていると、また「早く行け」という声。もう家に着いてもよいころだと思いながら、歩いて迎えに出ました。

道路には車も走っておらず、人も子供たちの姿もありませんでした。堤防の上で消防団員2人が、ただならぬ様子で作業をしていました。

私は不安で仕方なく、とにかく急いで歩き、学校に着きました。子供たちは校庭の端の方に集まっていました。孫は先生に連れられて泣きながら来ました。その時、同級生のお母さんが車で迎えに来ました。同じ方向でしたので乗せていただきました。

家に着き2階へ上がって窓の外を見ると、堤防にぶつかった津波が高く上がり、波にのめられた船が逆さまになっていて、真下の船着き場では別の船をロープでつなぐようとしている人がいました。一瞬のこの状況に驚き、階下に下りると、消防団員の「早く逃げろ！」の声。玄関を開け

ると津波が目の前でした。急いで高い所に駆け上がり、振り返ると前の家が流されていました。電柱が倒れ始めたので、近所の方たちも国道の方へ上がりました。あの荒れ狂う津波を、高台にあるお宅の前でみんなで驚きながら見ていました。

あの時、孫と私を乗せてくださったお母さん、本当にありがとうございました。命の恩人だと思っています。船越小学校では1人の犠牲者も出ず、本当によかったと喜んでいますが、一歩間違えば私たちが大変な迷惑を掛け、今、こうして元気にしていられなかったと思います。

2年過ぎた今、振り返ると、本当に多くの方々からご支援を頂きました。心から感謝しています。そして多くの事を学びました。皆様、本当にありがとうございました。

「明日へ向かって」第2集

長根美紀（42歳）

あの日、大きな揺れが収まらない中、家にいた私たち4人は非常袋を持ち、船越小学校に避難しました。小学校には次から次と避難の方々が集まり始めました。

私は「ここは高台だから津波は心配ないだろうし、持病がある義母がもし具合悪くなったとし

でも、避難所になっているから安心だ」と思いました。まだ強く揺れてはいるけど、安全な場所にいると思うと少しホッとして、調理室側の緑のフェンスまで近寄り海を見ていました。

すると、潮が引き、黒い海底が現れ、沖から津波が押し寄せ始めたのです。海面はみるみる水位を上げました。大きな、大きな渦を巻き、サップ舟などが巻き込まれ始めます。あつという間に防潮堤のギリギリの所まで水かさ上がり、前須賀公園の防潮堤から津波があふれ出しました。一分一秒と変わりゆく状況に私は怖さを覚え、まだまだ強く揺れている地震と押し寄せた津波に「もし、私のいる小学校前の防潮堤が……」と思うと身体がガタガタ震えました。小学校の昇降口まで下がり、義母にフェンスから離れるように促しました。でも、周りの方々と「ここまでは来ない」と言つて、家のある方向を見ていました。その時点で、小学校の昇降口側に避難していた方はざっと30人強はいました。

しばらくすると「津波だ」の聲が所々から上がりました。声がする方向を見ると、防潮堤からあふれ出した津波の勢いで、学校坂下の民家が土台からスパッと切られたかのようにひっくり返りました。津波は土手を駆け上がり、先生方の車が波頭に押されて傾き、一斉にボンネットを上げました。

そしてそのまま押し上げられ、今度はボンネットを下にし、坂に向かってダンと落ちたのです。同時に、津波の先頭が白波を立てながら、坂をぐんぐん上がってくるのが見えました。

私たち家族は津波のものすごさに「てんでんこ」に逃げました。「ここは安心、安全だ」と思

い込んでいたため、逃げる時機の判断を狂わせたのです。

たくさんの方々が走り去る中、私は1本の木にしがみつきました。「さつき見た津波が夢であつてほしい」と、胸がドキドキしていた次の瞬間、津波にのみ込まれ、その勢いで木から手を離してしまいました。幾度か流れに逆らってみました。どうにもできないと分かり、身を委ねた方がいいと思ったことを今でも覚えています。その後、私は氣を失ったようです。

どのくらい時間がたったのでしょうか。どこか遠くから車のクラクションの音が聞こえてくるなあと思つてみると、鼻を突くようなガソリンの臭いがしました。「私はまだ生きている……」と意識が朦朧とする中、深く、そしてまた深く呼吸しました。自分がどこに流れついたのか確認しようと目を開けると、杉や松の木が重なり合い、倒れているのが見えました。

そこは学校脇の沢で、とても大きな木が立ち並んでいる中の3本の木に魚網が絡み付いていて、それが私の命綱になって助かったらしいことが分かりました。そつと後を振り返ると、茶色に濁った津波の山にたくさんの方が浮かんできているのが見えました。「この津波に、またさらわれたら、もう駄目だ。助からない。ここから逃げねば」と思った時に、役場の放送が聞こえました。「もつと高い所へ逃げろ」というのです。私は、この言葉に正直少々腹が立ちました。

全身、脱力感で思うように力が入りませんでした。手で足を引っ張り上げ、立ち上がり、四方八方に倒れた木や何台も重なってできた車の壁、ありとあらゆる物ががれきとなり散乱している中、腰くらいまである沢に顔を沈め、土手に向かって潜りました。どうにか渡り切り、土手を

田の浜

Tanohama

5

chapter 5

大津波は船越湾漁協(写真奥、黒っぽい建物)と船越漁村センター(左上、白い建物)の最上階まで達し、町をのみ込んだ
(3月24日午後4時22分撮影)



はい上がると、目に飛び込んで来たのはがれきの山でした。

状況のひどさにショックを受け、一緒に避難した家族は誰一人生きてはいないのではないかと
思えてきて、こみ上げてくる恐怖心と悲しみでいっぱいになりました。最後の気力を振り絞り、
助けを求め、歩き出しました。しかし、そこには見慣れた家はなく、土台と流れついたがれきだ
けでした。脱力感と無力感に襲われた私は、正常な判断ができないまま、高い所を求め、山の中
に独り避難しました。

翌朝、一緒に避難した家族と再会することができました。みんな無事で良かったと思うと、涙
と安堵が入り混じり、言葉になりませんでした。最後の最後まで家族に心配をかけて申し訳な
かったと思いました。

今、私が笑顔で日々過ごしているのは、私の生存を信じてあきらめず捜してくれた家族のおか
げです。心から感謝しております。ありがとうございました。しかし、多くの犠牲者が出た事を
考えると、胸が痛み複雑な気持ちになります。あの日・あの時を忘れず、生かされた命を、私な
りに精いっぱい前向きに生きていかねばと思います。

「忘れない・そして前へ」